

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。  
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を  
込めて撮影している。

登野原利子さんは、友人のお母さんで、私が竹富島に移り住んだ頃から「アキちゃん！」と声をかけて可愛がってくれた。道ですれ違ったり、友人宅の庭先で顔を合わせたりすると「ありがとうねえ。アハハハ」とよく笑いながら声をかけてくれた。

今は、竹富島を離れて石垣島で療養生活を送っているので、以前のように顔を合わせることがなくなってしまったけれど、時折風のない晴れた日に、利子さんのことをフツと思い出し会いたくなる。

私が知っている利子さんは、誰も被らないオリジナリティの持ち主だ。満月と新月を同時に持ち合わせたような、大潮と小潮が混在しているような、光と影の境界線が存在しないような、言葉では表しにくいけれど、沖縄の自然の中に「居る」人だ。そしてコロコロと変わるその表情でいつも私をグッと惹きつける。そんな彼女が好きで何度も写真を撮らせてもらっている。

利子さんは真夏の暑い日にも自転車を引きながら新聞を配達したり、商店へ買い物に出かけたりしていた。郵便局などに行くために私が車で集落内を走っていると、利子さんが木の陰で一休みしている姿をよく見かけた。その度に、「あ、利子さんだ」と心の中で呟き、用事を済ませて帰る時ただ気になるというだけで、同じ道を通って利子さんがまだそこにいるかを確認したりしていた。

利子さんには、咲き乱れる南国の花に負けない存在感があり、満開のブーゲンピアがよく似合っていた。

今日みたいな風のない晴れた日には、大きな福木の木陰で、自転車を脇に停め、しゃがんで一休みしている利子さんの「ありがとうねえ」という声が聞こえる。



水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。